■公開フォーラム「古代文明の生成過程－西アジアとアンデスの比較－」

山本睦（国立民族学博物館機関研究員）

2014 年 1 月 26 日（日）、ＪＰタワー＆カンファレンスホール 1 において、公開フォーラム「古代文明の生成過程－西アジアとアンデスの比較－」が催された。国立民族学博物館、科学研究費補助金基盤研究（S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（代表：関雄二）が主催し、古代アメリカ学会が協力しての開催であった。

旧大陸と新大陸の古代文明についての最新の研究成果が聞けるとあり、一般参加者が 104 名と盛況で、最後のディスカッションでは予定していた時間が足りなくなるほど質問やコメントが多く寄せられ、非常に有意義な会であった。

発表者は、発表順に三宅裕（筑波大学)、下釜和也（古代オリエント博物館)、芝田幸一郎（神戸市外国語大学)、関雄二（国立民族学博物館）の 4 名である。

従来、西アジアでは豊かな自然環境のもと、狩猟採集から農耕定住、余剰生産物の蓄積、そして巨大なモニュメントの建設へと連なる文明形成過程が示されてきた。その一方、アンデスでは西アジアと異なり、神殿を中心とした独自の文明形成過程が指摘されてきた。しかしながら、近年の両地域における調査成果によると、両地域に展開した古代文明についての文明観、あるいは両文明の特性についての議論は大きく変化しつつある。

このことをふまえて、本フォーラムでは最新の調査成果にもとづいた発表がおこなわれた。前半の西アジアの発表では、はじめに三宅氏によりトルコ南東部に位置するギョベックリ・テペ遺跡での発掘調査データを中心に、新石器時代についての新たな社会像が提示された。次に下釜氏は、新石器時代から銅石器時代までのメソポタミア地域を俯瞰しながら、現状で把握される文明形成の筋道を示した。後半のアンデスの発表では、まず、芝田氏がペルー北部海岸ネペーニャ谷のワカ・パルティーダ遺跡での調査成果をもとに、アンデス形成期の世界観を示した。また、関氏はペルー北部高地のパコパンパ遺跡におけるジャガー人間を表した石彫の発見などを通じて、アンデスにおける社会的格差の出現について論じた。そして最後には、両文明の比較検討を含めた総合的な討論がおこなわれた。

以下は、各発表の概要である。

・三宅裕

「西アジア最古の「神殿」－アナトリア考古学最新事情」

本発表では、ギョベックリ・テペ遺跡の調査成果をもとに、西アジアにおいて従来示されてきた社会像および社会過程を再考する必要があることが示された。

これまで新石器時代は、平等主義的で単純な農耕村落社会であると考えられてきた。しかし、調査の進展によって、新石器時代にすでに公共的建造物が存在し、広範な地域から人々が集うセンターが存在したことが明らかにされた。また、そうした遺跡の立地、出土遺構や遺物からは、いくつもの集落や地域をまとめるような複雑な社会組織が存在したことも指摘された。さらに、新石器時代後半になり、農耕や牧畜が営まれた明確な証拠が認められるようになると、集落の規模が縮小し、集落構造も崩壊して、公共的建造物がなくなることが示された。これらの成果をふまえて、農耕や牧畜を基盤とした社会の成立が、西アジアの社会的発展の基礎となったとする従来的な解釈の単純さが批判的に示され、生業に対する評価を見直す必要性が指摘された。

・下釜和也

「西アジアにおける文明形成と社会変容－最近の調査成果を中心に」

本発表は、不安定な政治状況による資料面での地域的制約はあるものの、メソポタミア地域全体を対象として、農耕牧畜社会の変質から都市文明の成立に至る過程を、近年の調査成果をふまえながら論じ

たものであった。
　銅石器時代前半のウバイド期には、メソポタミア南部で神殿が建設されたものの、小規模な村落が大部分であり、政治権力をもつような首長は存在しなかった。しかし、その後の北部地域では、大規模集落で公共建造物が認められるなど、首長層の存在が確実になる。さらに、首長層の成長とともに都市集落が現れ、生業体制も変化したことが明らかとされている。後期銅石器時代後半には、南部地域で大規模神殿を有する大都市が形成されることから、データは乏しいものの、おそらく南部では早い段階で都市社会が形成されていたと考えられる。総じて、都市文明の展開には大きな地域差がみられるが、こうした都市社会の展開や南北地域間の社会過程、および両者の関係といった問題の解決には、とくに南部での調査の進展が期待されることが述べられた。

・芝田幸一郎
「古代アンデスの神殿と世界観：ワカ・パルティーダ遺跡の壁画をめぐって」
　本発表では、2013 年に実施されたペルー北部海岸ワカ・パルティーダ遺跡での発掘調査によって検出された多彩色壁画と神殿建築との関係から、アンデス形成期における神殿と世界観についての考察が示された。
　芝田氏は、セロ・ブランコとワカ・パルティーダという近接した神殿遺跡の発掘を手がけ、両者の共通点として、神殿が壁画によって彩られていたこと、神殿の増改築時に饗宴がおこなわれていたことを明らかにした。その一方、相違点として明白となったのは、建築プランや壁画の図像の差異である。こうしたデータは、両神殿の関係や形成期の社会過程を論じるための貴重なデータといえる。
　今回新たに発見された壁画のデータからは、ワカ・パルティーダの外壁ほぼすべてが壁画で覆われていたこと、各壁画とそれらの建築上の位置を考え合わせると、複数の壁画が立体的な組み合わせとして機能しており、地下・地上・天空といった世界観が神殿に表現されていた可能性があることが指摘された。また、この仮説を検証するために、今後も継続して調査をおこなっていく必要があることが述べられた。

・関雄二
「ジャガー人間石彫の発見―アンデス文明における社会的格差の出現」
　本発表は、2013 年にペルー北部高地のパコパンパ神殿遺跡で発見された石彫の意義、および石彫がつくられたアンデス形成期に生じた社会的格差の出現について論じたものである。
　石彫は、遺跡の第 1 基壇から第 2 基壇へと続く階段の登り口で検出されたが、この階段は形成期に築かれ、利用されたあとで、続くカハマルカ期の人々の手によって封印されたことが判明している。
　石彫には高浮き彫り技法で、ネコ科動物的な牙をもった顔と人間的な胴部を組み合わせた姿が表現されており、発見された場所や保存状態から、階段の登り口に据えられていたと考えられる。この石彫がつくられたと考えられる形成期後期には、ペルー北部で大きな社会変化が生じたことがこれまでの調査によってわかっている。そのため、石彫の人間が合わせて表現された姿は、社会変化に伴う権力の発生と結びつけて考える必要がある。つまり、石彫は、祭祀をつかさどるリーダーの宗教的能力の卓越性を顕示する意図と、それを石という耐久性のある素材で表現することで永続性を意識したものと考えられるのである。さらに、この石彫が検出されたコンテクストが特殊なことから、階段の崩壊と封印の過程で石彫が意図的に倒されたものの、その力を恐れてか、事前に封印の儀礼が執りおこなわれたことが示唆された。なお、このような後代の人々による奉納と封印は、遺跡全体で起きた現象であることも指摘された。

(写真提供：科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」
　　プロジェクト)
主催：国立民族学博物館

科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」
（代表：関雄二）
協力：古代アメリカ学会